

福岡・元岡遺跡群

もとおか

- 1 所在地 福岡市西区大字桑原字履形
- 2 調査期間 第一五次調査 一九九九年(平11) 六月～一〇月
- 3 発掘機関 福岡市教育委員会
- 4 調査担当者 吉留秀敏
- 5 遺跡の種類 水田跡・製鉄跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代、七世紀後半～一三世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(前原)

遺跡は福岡市の西端、糸島半島東側の山間部にある。この付近は標高一〇〇m以下の丘陵地帯であり、小河川により樹枝状に浸食されている。昨年三点の木簡が出土した第七次調査地(本誌第二号)の北西約六〇〇mの位置にあたる。ちなみに第七次調査地と第一五次調査地との間は丘陵が塞ぎ、水系が異なる。第一五次調査地は、糸島半島では比較的水量が豊かな大

原川沿いにあり、大原川北岸の低地と、そこから枝分かれした小さな谷に連なる範囲にあたる。この小さな谷はほぼ東方に開口する、幅四〇m奥行き約一五〇mほどの規模である。谷部を第一二次、谷の前面水田を第一五次として調査した。第一二次調査地は標高約二二～三五mであり、第一五次調査地は標高約一二～二二mを測る。

第一五次調査では、古代末～中世前半期の水田遺構を検出した。大原川沿いの低地や谷部を造成し、用水路や水田、畦畔が造られている。用水路や水田土中から土器・瓦器・輸入陶磁器類の破片が出土した。水田面の下部は古墳時代から古代の遺物包含層である。土器類の他に刀子柄、曲物などの木製品も少量出土した。

木簡は調査地西側の遺物包含層下部で出土した。包含層には鉄滓や炉壁片など製鉄関連遺物を多く含むが、木簡はこの包含層の下部、谷底に近い礫混じり砂層から出土した。木簡の出土状態は遺構を伴わず、径約一mの範囲に破断、散在していた。

なお、西側に隣接する第一二次調査地からは谷部斜面に八世紀前半頃の二八基の製鉄(製錬)炉が発見されている。このうち最も東に検出された製鉄炉は、今回の木簡出土地と約一〇mの至近距離である。木簡を覆っていた包含層に含まれる鉄滓などは、これらの製鉄炉群から排出されたものと考えられる。以上、この木簡は出土位置や状況からみて谷部を造成して行なわれた大規模な製鉄操業の直前に埋没しており、事前に行なわれた儀礼に関わるものと推定される。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「凡人言事解除法 進奉物者 人方七十七隻 馬方六十隻 須加×

水船四隻 弓廿張 矢冊隻 五色物十柄 □多志五十本 赤玉百□ 立志玉百□

□□二柄 酒三×

×米二升 栗木二□ □木八束」

〔束カ〕

450×(60)×5 061*



木簡は折敷の底板を転用したものであり、十数点に破断していたが、ほぼ全て接合した。ただし完形にはならず、左側およそ三分の一は半分を欠損している。木簡の右上部に二つの穿孔があり、一つには紐様の断片が残る。墨書はこの穿孔と重複して記されていることから、この穿孔は折敷の段階で設けられたとみられる。

墨書は片面のみに記され、三行遺存する。破断部などを除き、全体に比較的明瞭に読むことができるものの、左側は墨痕がしだいに薄くなっている。一行目の「馬方」は「鳥方」の、三行目の「栗木」は「桑木」の可能性もある。

本木簡は「解除」、すなわち祓に用いる祓具の品目と数量を記している。「人方」「馬方」の「方」は「形」の当て字と考えられる。祓具は記載分だけでも十五種に及び、数量も多い。そのうち六種には合点が付されている。現在整理途中であり、詳細な検討は本報告に譲るが、律令制の初期に地方で行なわれた儀礼の具体的内容を検討する好資料となろう。

なお本木簡の釈読には、八木充、狩野久、橋本義則、坂上康俊各氏によるご検討と、金子裕之、館野和己両氏をはじめとする奈良国立文化財研究所の方々のご協力をいただいた。

(吉留秀敏)